



ミステリーゾーン
ロッド・サーリング
(矢野浩三郎他訳)
集英社(文庫) (10
/25刊・¥420)

さすがに「ミステリーゾーン」をリアルタイムに見たことはなくて、再々放送を切れ切れに眺めたぐらいの印象では、スビルバーグほどの思い入れも湧いてこない。しかし、場面のところどころが、妙に記憶に残っていたりする。もう二十年以上昔のテレビシリーズである。

『ミステリーゾーン』はノヴェライズ短篇集四冊から、編者が九篇を選び出したベスト作品集。同時期に出た『真夜中の太陽』(山口書店刊)は六二年に出た短篇集から四作をまとめたもの。前者に、どちらかというところスバルジイと幻想味が強く、後者にSF味が強い。小説だけを読むと、古びてしまった題材も少なくないが、むしろ映像のバイオニアとして高く評価すべきなのだろう。テレビシリーズの脚本は、サーリング自身が大半だった。中には、マシスンやポーモントラの作品もある。やがて、アウターリミッツ、辺りから、エリスンなどが加わり、後の「スタートレック」で今日のアメリカ現代SFの作家が、多く脚本を手がけるようになる。いわば幕開きに相当する番組であり、作家たちに与えた影響は大きなものだった。